

2022/1/30

ヨハネの手紙第一 講解メッセージ⑩

『神から生まれた者は罪を犯しません』 I ヨハネ 3:9-3:18

■神から生まれた者は罪を犯さない

「だれでも神から生まれた者は、罪を犯しません。なぜなら、神の種がその人のうちにとどまっているからです。その人は神から生まれたので、罪を犯すことができないのです。」(I ヨハネ 3:9)

神から生まれた者とは、神の呼びかけに応答し神を信じるようになった者、つまり、イエス・キリストを信じる者ということです。私たちは神と分離した状態にありましたが、神の呼びかけによって神と再結合しました。それが「神から生まれた者」です。では、「神から生まれた者は罪を犯さない」とはどういうことでしょうか。

聖書の原文で「罪」という言葉は、複数形か単数形かで使われ方が異なり、単数形の場合は主に「神と分離した状態」、複数形の場合は「罪の行い」を表します。神との分離は、死によってもたらされました。神に造られ、神のいのちに支えられているのに、神と分離した状態になったため、人は不安で仕方ありません。その結果、人は何か別のものにつながろうとしますが、見える世界のものにしがみつこうとすればするほど様々な罪の行いが生じます。お金のしがみつこうとすればお金に関する競争が生まれ、人に結びつこうとすれば誰が愛されるかの競争が始まります。いつも互いを比べ、嫉妬が生まれ、怒りが生まれ、それが様々な罪の行いにつながります。複数形で表されているのは、このような罪の行いです。「神から生まれた者は罪を犯すことはできない」の「罪」は単数形で、イエス・キリストと再結合した者は神と分離することはできないという意味です。つまり、自分の行いがいくら不完全であったとしても、神と再結合した者はイエス・キリストが神であることを否定することはできないということです。

「神の種」は、この場合「神のいのち」と考えるとわかりやすいでしょう。神は人を地のちりで形造り、そこにいのちの息を吹き込まれました。(創世記 2:7) 私たちの中には神から貸し出された神のいのちがあり、そのいのちによって支えられて生きています。神が人間を造るにあたり、まず体を造られたということは、人間は魂だけでは生きられず、体が必要不可欠だということです。もし魂だけで生きられるなら、神は体を造ったりはしなかったでしょう。しかし、今の私たちの体は肉の体でいつか朽ち果ててしまいます。体が朽ち果てると貸し出した魂は神に返却されます。私たちを支えていた魂がなくなると、人は生きるものではなくなくなってしまいます。つまり、滅ぶわけです。だから神は、朽ちる体になったアダムとエバに、あなたの体は土に帰ると言われました。つまり、人間は生まれながらに死を宣告されている、生きてるように見えても死んでいるということです。そこで神は、神が吹き込んだ人のいのちがいつまでも体にとどまることができるように、霊のからだを用意してくださ

いました。霊のからだを着せる、これが永遠のいのちを持つということです。

私たちは神の呼びかけに応答し、霊のからだを受け取りました。この世界ではまだ死の体を持っていますが、同時に霊のからだも持っていて、神に貸し出された魂はこの霊のからだに永遠にとどまり続けることができます。つまり、私たちは永遠のいのちを持ち、死からののちに移っているのです。神から分離されることはありません。

「神から生まれた者は罪を犯すことができない」とは、行いの罪のことではありません。ですから、「罪を犯す自分は神から生まれていない」と誤って理解しないようにしましょう。ヨハネ第一の手紙は一貫して永遠のいのちについて語っていますから、そのような意味でないことは明らかです。

## ■兄弟を愛さない者

「そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはっきりします。義を行わない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。」

( I ヨハネ 3:10)

イエス・キリストを否定するかしないかで悪魔の子どもとの区別がつきます。聖書が教える義とは、罪を言い表して神の赦しを受け取ることです。つまり、罪を赦される経験をしていない者は神から出た者ではありません。罪を赦される経験、それはイエス・キリストを信じることです。さらにヨハネは、神の子かどうかを知る新たな基準を提示しています。それは、「兄弟を愛さない者は神から出た者ではない」という基準です。私たちは神と再結合し、永遠のいのちを受け取りました。しかし、それで救いが完成したわけではなく、神はさらに人の苦しみを取り除くという治療をしたいと願っておられます。救われた後も死の体を持っているために自分がしたくない罪を犯してしまう私たちを、この苦しみから解放してください。神の福音は私たちを死からののちに移すだけでは終わりません。

「互いに愛し合うべきであるということは、あなたがたが初めから聞いている教えです。カインのようであってははいけません。彼は悪い者から出た者で、兄弟を殺しました。なぜ兄弟を殺したのでしょうか。自分の行いは悪く、兄弟の行いは正しかったからです。」( I ヨハネ 3:11-12)

カインは行いによって自分の義を証しようとしてしました。私たちが苦しめている究極の問題は愛せないことです。それは条件をつけるからです。律法という行いの規定で人の価値を判断し、〇〇ができれば愛する、できなければ愛する価値がないという生き方をしています。だから、私たちは人を愛せなくなるのです。

よく私たちは「人につまずいた」という言い方をします。そうすると、相手が悪いのであってつまずかされたほうは被害者だと思いがちですが、本質は違います。それは自分の要求に応えてくれない相手を愛せないということです。相手に律法を突きつけるからつまずくの

です。しかし、神の命令は「愛しなさい」です。その神の命令に従えないことが問題なのです。

つまり「兄弟を愛せない者は神から生まれていない」という御言葉は、神の救いは永遠のいのちを与えて終わりではなく、人を愛せる者にするとところまで含まれるということです。それは、愛せないことが人の苦しみだからです。私たちがする悪い行いは、原因をたどっていくとすべて愛せないことに行きつきます。愛せないのは、条件（律法）をつきつけているからです。

「つまずいた」という言葉はきれいに聞こえますが、要するに神のことばに従えませんという反逆なのです。つまずく人は被害者ではなく、神のことばに従おうとしていないだけだということです。この事実を認めなければなりません。

「兄弟たち。世があなたがたを憎んでも、驚いてはいけません。私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。」（Iヨハネ 3:13-15）

私たちはキリストを信じるがゆえに迫害されます。イエス・キリストを信じるだけでなく、兄弟を愛することがいのちに移ったことの証です。もし兄弟を愛していない人は、神と分離した者のように生きているということです。救いのその先に行こうとしていないのです。「兄弟を憎む者は人殺しです」とありますが、イエス様もまったく同じように言っておられます。イエス様は、心の中で「馬鹿者」と言うのは人を殺したのと同じだと言われました。人を憎んだり赦せなかったりするの人は人を殺しているのと同じなのです。「そのような者に永遠のいのちがとどまっていることはない」とは、永遠のいのちを受け取ったのに神の治療をまだ受けていないということです。

この基準に照らされるとすべての人は人殺しです。イエス様は、姦淫の現場で捕らえられた女性に石を投げようとする人々に向かって、「この中で罪を犯したことはない者が最初に石を投げなさい」と言われました。しかし、そんな人はいませんでした。つまり、誰もが罪人なのです。

「キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。」（Iヨハネ 3:16-18）

もしかしたら、自分は誰のことも憎んでいないから罪人ではないと言う人がいるかもしれ

ません。しかし、兄弟のためにいのちを捨てることはできるでしょうか。できません。困っている人たちのために全財産を施すことができるでしょうか。できません。聖書は、そのような人のことも神の愛にとどまっていなといいます。つまり、すべての人は罪人なのです。

### ■すべての人は罪人である

なぜ聖書はここまで私たちを罪に陥れたいのでしょうか。それは、私たちの苦しみを完全に排除するためです。自分は救われて安心だと言う人も完全にいやされたわけではなく、愛せないという苦しみがまだ残っています。その苦しみを排除するためには、私たちは自分の罪に気がついて神に言い表し、いやしを受け取る必要があります。これによって私たちは平安を手にすることができるのです。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。もし、罪を犯してはいないと言うなら、私たちは神を偽り者とするのです。神のみことばは私たちのうちにあります。」（Iヨハネ 1:9-10）

私たちはとにかく神の前に罪を言い表せばよいのです。罪を赦されるという治療を受け取ると、神への愛が創造されます。多く赦された者は多く愛するようになる、これが癒しなのです。癒しとは、神を愛せるようになり、人を愛せるようになることです。神は私たちを救った以上癒したいのです。私たちが人を愛せるようになり、私たちの苦しみを取り除きたいのです。

「しかし聖書は、逆に、すべての人を罪の下に閉じ込めました。それは約束が、イエス・キリストに対する信仰によって、信じる人々に与えられるためです。信仰が現れる以前には、私たちは律法の監督の下に置かれ、閉じ込められていましたが、それは、やがて示される信仰が得られるためでした。こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。」（ガラテヤ 3:22-24）

聖書は私たちを厳しい律法の下に閉じ込め、私たちが罪人であることを突きつけます。それは、イエス・キリストを信じる信仰によって癒されるためです。私たちはイエス・キリストを否定することはもうできません。しかし、それでおしまいなのではなく、次は治療があります。神様は私たちの本当の苦しみを知っていてそれを取り除きたいのです。それは人を愛せないという苦しみにつきます。私たちは律法に生きているから人を愛せません。そのために罪が赦される体験をさせたいのです。そうすれば愛せるようになるからです。

「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとは五百デナリ、ほかのひとは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。「この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」そして女に、「あなたの罪は赦されています」と言われた。」(ルカ 7:41-48)

私たちは多くの罪が赦されるという経験をする中で神を愛せるようになり、人を愛せるようになります。これが神のいやしです。そのためには、あなたが罪人であることに気がつかなければなりません。私たちは、良いことだとわかってはいても、兄弟のためにいのちを捨てることも、困っている人のために全財産を施すこともできません。自分ではどうすることもできない罪人なのです。このことを神の前にへりくだって認めることができれば、神は私たちの罪を赦してくださるのです。そのことによって神への愛が創造されていくのです。神を愛せるようになれば、人を愛せるようになる——これが律法を廃棄するということです。律法に仕えるのではなく、神を愛したい、人を愛したいという生き方になっていくことが、癒しです。神はこの癒しを与えたいのです。罪が無条件で赦されること以上に平安はありません。神は私たちにこの平安を手にしてほしいのです。

「それによって、私たちは、自分が真理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。たとい自分の心が責めてもです。なぜなら、神は私たちの心よりも大きく、そして何もかもご存じだからです。」

(Iヨハネ 3:19-20)

「それによって」とは、「多く愛することによって」ということです。多く愛し多くの罪が赦されることによって、ますます私たちは神に属していることを知るようになります。それが私たちに平安をもたらします。こうして私たちは罪責感を乗り越えた平安を手にすることができます。